

「日本の帳簿会計の歴史」

「日本の帳簿会計の歴史」(帳簿の世界史 文芸春秋)

初期の帳簿は律令制とともに中国から輸入された

日本の「帳簿史」は、律令国家の成立とともに始まった。飛鳥時代、孝徳天皇や中大兄皇子らが中心となり推し進められた大化の改新は、中国の律令制を参考に、天皇を中心とした新たな国家体制を日本に導入しようとする政治改革であった。その動きの中で、日本は「帳簿によって財政の収支を記録する文化」を中国から輸入した。

日本における初期の帳簿は、誰がどのようにつけていたのであろうか。

当時の会計帳簿としては今も、正税帳と呼ばれる資料が残っている。正税帳とは、中央から各国(地方の行政単位。尾張国、摂津国など)に派遣された国司が作成した、その国における1年間の収支決算報告書である。地方行政のトップであった国司たちは、その国における戸籍の作成や、税の徴収に関する責務をになっていたが、その具体的な内容は文章で朝廷へ報告することと義務付けられていた。

当時、地方の財源は「正税」が中心であった。正税とは、各国の正倉と言う倉庫に蓄えられていた稲のことで、国司たちはこれを、毎年春に高利で農民に貸し付け、その利息を徴収することで財源を確保していた。その収入と、諸経費の資質をまとめたのは正税帳である。朝廷へ毎年提出されていたこの正税帳は、民部省の主税寮という機関で監査された後、不備があった場合には差し戻され、不足分の納入などが要求された。一方、各国で実際に正税帳をまとめていたのは、国司の下で働いていた事務職クラスの役人であり、代々朝廷に使えていた一族や、渡来人の一族などが中央から派遣され、その任に当たっていた。

資料としては残っていないが、その他にも兵部省や大蔵省など、中央の各行政機関においても、毎年の収入と支出をまとめた会計帳簿は作成されていたと考えられている。また、東大寺の写経所では、経を書き写す際に、それを依頼してきた行政機関や貴族に対して見積もりを作成し、請求するための帳簿を作っていたこともわかっている。このように、様々な組織で作成されていた帳簿だが、当時はその際に木簡を使用することもあった。木簡は文書を作成するためのデータ整理や、簡単な報告を記載するために使われていたようだ。

しかしながら、この時代の帳簿は収入と支出を書きとめたただけのものであり、財政の正確な把握に不可欠な複式簿記からはほど遠いものであった。また、当時の日本には、1年の収支を正確に見積もり、それをもとに国家予算を立てる、といった習慣がなかったため、帳簿が政府や各地方自治体で大きな役割を果たすこともなかった。先の正税帳も、財政の正確な把握のためと言うよりも、国司の勤務評価の資料として活用されていた。これは、当時の日本はそもそも国家予算を立てられるほど行政機関が発達していなかったことや、律令制を敷く際に、それまでの豪族たちが各地で蓄えていた財産を中央政府が徴収していたため、厳しく財政を管理しなくても良いほど国庫は潤っていたためだと考えられている。

「財布の紐」が中央から地方へ

奈良時代と比べて、平安時代はあまり資料が残っておらず、会計帳簿についても未だわからない部分が多い。だが、会計の技術に関しては、先の時代から大きな進歩がなかったと考えられている。一方で、正税帳のようなしっかりした帳簿は、徐々に作られなくなっていったようである。それは、律令制下での徴税システムが制度疲労を来していたためである。奈良時代末期から、民衆の間では重税から逃れるため、戸籍上の本貫地（所在地）から不法に離脱する、浮浪・逃亡が相次いでいた。また、税の負担を軽くするために男子を女子として役所に届ける「偽籍」も増加していた。このため、戸籍をもとに土地を配分し、民衆一人ひとりから税を徴収するという班田収授のシステムは、平安時代にはほとんど機能しなくなっていたのである。

一方、それまでの日本の国家財政を支えていた「貯金」も当然ながら時を経るにつれて、底をつきはじめていた。平安京をはじめとする都の建設や、蝦夷討伐など、この時代には大規模な国家事業が続いていたため、徴税と言う「フロー」の面だけでなく、「ストック」の面からも国家財政は厳しい局面を迎えることになっていた。

そこで中央政府は、徴税システムの変革に取り掛かった。この頃には、各地の国司は受領と呼ばれるようになっていたが、その受領に対し朝廷は、「4年の任期の中で一定額の税を納めれば、あとの国内統治は一任する」との方針を示した。いわば、「納めるものだけ納めれば、後は自由にやって良い」と言う制度に変わっていったのである。

この枠組のもとでは、朝廷から義務付けられた以上の税を取り立てることができれば、受領たちはその余剰分を自らの取り分とすることができる。そこで彼らは、家来を引き連れて赴任したり、赴任先で地元の有力者を配下につけたりしながら徴税を徹底し、私服を肥やして行った。その儲けの一部は、中央政府への賄賂にも使われたため、その日本の貴族階級は地方・中央ともに豊かになっていった。

こうして、社会の変化に対応できなくなっていた徴税制度は、各国の受領たちに権限を委譲することで再び機能し始めた。その改革の中心にいたのは、摂関政治を行っていた藤原氏である。道長の時代には全盛を極めた藤原氏だったが、やがて時代の主役は武士たちへと移っていく。

その過程で重要だったのは、「財布の紐」が、中央政府から各地の受領たちへ移っていたことである。それぞれの国で絶大な力を有するようになったら受領たちの中には、帰京せずに土着化していくものもいた。彼らの一部はやがて自衛のために武装化し、地元の富豪層を従えて武士団を形成した。その中から、平氏や源氏などが登場するのである。

江戸時代は独自の複式簿記が存在していた

鎌倉・室町時代には、幕府によって守護・地頭が各地に設置され、彼らはその土地の徴税を請け負うようになったものの、中央と地方の関係は受領制とほとんど変わらなかった。そして、その中から力をつけたものが大名となり、やがて戦国時代が始まるのである。

その後、日本の帳簿に革命が起きるのは、江戸時代になってからである。江戸時代には、日本三大商人と呼ばれる伊勢商人、近江商人、大阪商人の間で、独自の複式簿記が使われるようになった。

それは西洋の正式な節簿記とは異なり、筆による縦書きで、ゼロはなかった（十進法ではあるものの、算盤での計算に置いてゼロは「飛んで」と読み上げられるため、帳簿にも記載されなかった）が、損益計算書や貸借対照表にあたるものが存在しており、又は一部には減価償却の概念も取り入れられるなど、西洋式のものとは比べても機能的に遜色ない帳簿であった。江戸時代の商人たちは、この「日本流複式簿記」と算盤を手にも、世界の中でも非常に高水準の帳簿をつけていたのである。

この時代、彼らが複式簿記を生み出すことができたのは、急速な経済発展と言う背景があったこそだった。その中心になったのは大阪である。当時の大阪には、各藩が年貢米や特産物を販売するために設置した蔵屋敷が置かれており、全国からあらゆる物資が集まっていた。また、堂島の米市場では世界初の先物取引（未来の売買について、前もって価格や数量を約束する取引）も行われており、大阪は、「天下の台所」として、日本経済・商業の拠点となっていた。

一方で、この時代の経済発展は、江戸の大量の消費者によって支えられていた。18世紀の初めには、江戸の人口は100万人を超えていたと考えられており、これは当時のパリやロンドンをも上回り、世界最大級の大都市だったのである。また、当時は江戸を中心とした東日本では金貨が、そして大阪を中心とした西日本では銀貨が主に使われていたため、その両替を行う両替屋も誕生した。このように、流通や金融が高度に発展していく中で、日本においても複式簿記が生まれたのである。

その会計技術は、それぞれの商人たちの間で、江戸時代を通じて大切に扱われていた。伊勢商人の系譜にあたる三井家では組織的な帳簿の教育が行われていたことをわかっている。毎年秋になると、閉店後に若い店員を集めて、先輩社員が読み書き算盤などの講義を行うことで、帳簿の技術は脈々と受け継がれていったと言う。この伝統を守りながら三井家では両替商としても活躍し、幕府御用商人となって力をつけていた。

やがて江戸幕府が倒れ、時代は明治へ移る。明治維新の最中、あらゆるものが西洋化していく中で、ヨーロッパで生まれた本格的な複式簿記も、日本に持ち込まれることになった。渋沢栄一が中心となって設立された国立銀行では、イギリスの銀行家、アラン・シャンドの教えのもと複式簿記が導入され、また森有礼が創設した商法講習所（一ツ橋大学の前身）でも、アメリカの簿記教師ウィリアム・ホイットニーによる複式簿記の講義が行われた。さらに、福沢諭吉も1873年に西欧式簿記を翻訳した「帳合の法」を出版するなどし、その後全国に洋式の簿記が広がっていった。とは言え、もともと西洋の複式簿記に近い帳簿を使用していたこともあり、日本の明治期における簿記の移行はなんら混乱もなく、非常にスムーズに行われた。

時代が変わっても、帳簿の力を身に付けていた商人たちの影響力は衰えることがなかった。

列強に追いつくため、「富国強兵」のスローガンを掲げた明治政府は、江戸時代から大きな資産を有していた商人の力に目をつけた。先に挙げた三井家は政商として、政府官僚と強いつながりを持つようになり、西南戦争期には、財政難に陥っていた政府から官営工場の払い下げを受ける。世界遺産に登録された富岡製糸場は、その一例である。こうした工場が、日本の殖産興業、産業革命をリードしていく。

その後三井家は三井銀行、三井物産などを立ち上げ、政府との太いパイプを維持しながら多角化する。そして財閥を形成した。三井家は当時の二大政党のうち、立憲政友会に多くの人と金を送り込んだ。もう一方の立憲民政党では、三菱財閥がその役割をになった。

このように日本史においても帳簿が歴史を動かす主役であった。

歴史の流れ

歴史の流れには大きく3つのポイントはある

1 経済の変化

2 海外の影響

3 リーダーとなる人物の登場

第1は、歴史が動く時には大きな経済の構造変化がある

経済が動けば産業も人の気持ちもいろいろなものが変わっていく

第2に、海外の影響を受けて歴史が動くことがある。

江戸時代には海外で産業革命が起き、欧州の国々がアジアに進出。このままでは日本は危ないと言うことで日本を近代化するための明治維新が起きた

そして第3のポイントは、歴史の中でその時代をになった人物がいた

稲作の始まりと土地への定着

日本人が土地に定着するようになったのは2~3世紀ぐらい。今から2000年ほど前。

この時期こそ今日の私たちの生活の礎となる日本経済史の始まりです。

縄文時代、人は川や海があった高台に住んでいましたが、稲作が広がったことにより、弥生時代には低湿地に住むようになりました。弥生土器などが出てきたのは、稲作によって生活の質が変わったことを表しています。

共同体ができ階層分化生まれる

稲作は多くの人で行ったほうが効率的であることから、共同で何かをしようという文化が生まれ、共同体ができました。

自分が必要とする量だけを作るのではなく、共同で効率的に生産し、それを分け合うという行為は経済活動そのものです。

やがて集落に住む人の数が増え、集落内には竪穴住居のほか、もみを補完するための高床倉庫も作られるようになりました。弥生時代の有名な登呂遺跡を見ると高度な土木工事をしていたことがわかります。高床倉庫によって食料保存できるようになると、それを奪おうと

する人も出てきました。敗れた人は奴隷にされるなど身分差も生じます。共同体を作ると、そこには階層ができ、階層文化ができてくる。稲作が始まり→共同体が生まれ→階層文化ができたと言う流れです。

大和朝廷が誕生

生産の為の共同体は村であり、村は家族、一族のようなもので、一種の国家（小国家）のようなものを作り、さらに生産を拡大するために連合体を作りました。周りの国を従えるなどして、国を大きくするところも出てきます。

やがて大和（現在の奈良県）の豪族たちが大王を（のちの天皇）を中心とした連合政権を作り、支配権を拡大しました。日本の大部分がヤマト（大和）の国、大和朝廷として統一されていったのです。大王は次第に力を増し、天皇として豪族たちを従えるようになりました。そしてたくさんの人々に、田に水を引くための池や溝を掘らせたり、川に堤防を作らせたりしました。田を耕すために鉄くわも使われるようになり、米の収穫も増えて、豪族たちの豊かさが増していきます。そして4世紀末ごろまでに東北地方を除く日本が統一されたのです。

大和朝廷は中国や朝鮮とも盛んに交流し、文字、仏教、儒教、建築、鍛冶、織物、養蚕などの文化を取り入れました。

国家の仕組み作りを目指した大化の改新

5世紀の終わり頃には大和朝廷で天皇の下に集まっていた大伴氏、物部氏、蘇我氏といった豪族間の勢力争いが激しくなっていきます。また当時の豪族は私有地と私有民を持ち、一族ごとに職務を分担していましたが、それでは有能な人材を適材適所で使う事はできません。そこで6世紀末から聖徳大使が改革に取り組みましたが、その努力が十分に実らぬまま、聖徳太子はなくなります。すると蘇我入鹿が聖徳大使の子を殺害。蘇我氏が天皇家のように振る舞って、権力を握るようになり、改革が進む事はありませんでした。

7世紀半ば、そのような状況を問題視したのが、中大兄皇子や中臣鎌足らです。中国への留学から帰国した者たちから、律令を基本法として中央集権の支配体制を整えた唐という国家の仕組みを教えられたからです。このままでは日本も唐に支配されると危機感を持ったのでしょう。実際朝鮮半島ではそのような動きが見られました。それまで高句麗、百済、新羅のいわゆる三国時代が続いていましたが、7世紀に新羅が統一。その背後には唐の支えがあったのです。危機感を持った中大兄皇子は蘇我入鹿を暗殺するなどをして、蘇我氏を滅ぼし「大化の改新」に取り組みました。

中央集権の単一国家へ

大化の改新は、土地と人民を天皇のものとする「公地公民制」とし、律令と言う法典で国を運営しようとするものです。農民に田を与え税を取る「班田収授法」が定められ、人民は田の面積に応じて「租」と呼ばれる稲を税金として納めることを求められました。ほかに都での労働の代わりに麻布を納める「庸」、絹などの特産品を納める「調」、また、兵役も課せられました。

701年には行政法や民法にあたる「令」に加え、刑法にあたる「律」も揃った「大宝律令」も制定され、国を運営するためのルールを完成させます。大化の改新とは、小国家の穏やかな連合だった大和朝廷を中央集権的にするものであり、これによって日本は単一国家になっていったのです。

土地は天皇のものから、民の荘園に

「公地公民制」では土地を天皇のものとし、農民に田を与えましたが、その後、奈良時代には、農民に与える田が不足したことから「三世一身法」を制定。農民が土地を開墾した場合、その土地を一定期間、私有することを認めました。しかし期間が過ぎると土地を国家に奪われてしまうため、農民のやる気が失せ、開墾は進みませんでした。

そこで743年、聖武天皇は「墾田永年私財法」を制定し、開墾した土地は永久に私有して良いこととしました。土地は私有地にしても、収穫したものから「租」を収めるさせれば良いと考えたのです。現代のように個人が土地を所有する歴史は、そこから始まったと言えます。貴族や寺社は農民を雇って開墾を進め、大規模な私有地を持つようになりました。これを「荘園」といいます。やがて荘園の自警団として武士が登場し、その武士たちが天下を取って変わり、江戸幕府が誕生していくのです。